

校異源氏物語・みのり

むらさきのうへいたうわつらひ給し御心ちの後いとあつしくなり給てそこはか
となくなやみわたり給ことひさしくなりぬいとおとろくしうはあらねと、し
月かさなれはたのもしけなくいと、あえかになりまさり給へるを院のおもほし
なけく事かきりなし、はしにてもをくれきこえ給はむことをはいみしかるへく
おほし身つからの御こ、ちにはこの世にあかぬことなくうしろめたきほたした
にましらぬ御身なれはあなちにかけと、めまほしき御いのちともおほされぬ
をとしころの御契かけはなれ思なけかせたてまつらむ事のみそ人しれぬ御心の
中にも物あはれにおほされける後の世のためにとたうとき事ともをおほくせさ
せ給つゝ、いかてなをほいあるさまになりてしはしもかゝつらはむ命のほどはを
こなひをまきれなくとたゆみなくおほしの給へとさらにゆるしきこえ給はすさ
るはわか御心にもしかおほしそめたるすちなれはかくねんころに思給へるつい
てにもよをされておなしみちにもいりなんとおほせとひとたひ家をいて給なは
かりにもこの世をかへりみんとはおほしをきてす後の世にはおなしはちすのさ
をもわけんと契かはしきこえ給てたのみをかけ給御中なれとこゝなからつとめ
給はんほとはおなし山なりともみねをへたてゝあひみたてまつらぬすみかにか
けはなれなん事をのみおほしまうけたるにかくいとたのもしけなきさまになや
みあつい給へはいと心くるしき御ありさまをいまはとゆきはなれんきさまには
すてかたく中く山水のすみかにこりぬへくおほしとゝこほるほとにたゝうち
あさえたるおもひのまゝの道心おこす人ゝにはこよなうをくれ給ぬへかめり御
ゆるしなくて心ひとつにおほしたゝむもさまあしくほいなきやうなれはこのこ
とによりてそ女君はうらめしく思きこえ給ける我御身をもつみかるるましき
にやとうしろめたくおほされけりとしころわたくしの御くはんにてかゝせたて
まつり給ける法花經千部いそきてくやうし給わか御殿とおほす二条院にてそし
給ける七そうのほうふくなとしなゝたまはすものゝいろぬいめよりはしめて
きよなることかきりなしおほかたなに事もいとかめしきわざともをせられ
たりことくしきさまにもきこえ給はさりけれはくはしき事ともゝしらせ給は
さりけるに女の御をきてにてはいたりふかくほとけのみちにさへかよひ給ける

御心の程などを院はいとかきりなしとみたてまつり給てた、おほかたの御しつらひなにかのことはかりをなんいとなませ給ける楽人舞人などのことは大将の君とりわきてつかうまつり給うち春宮後の宮たちをはしめたてまつりて御かた／＼こ、かしこにみす経ほうもちなとはかりのことをうちし給たに所せきにましてそのころこの御いそきをつかうまつらぬ所なければいとこちたきこと、もありいつのほとにいかく色／＼おほしまうけ、んけにいそのかみの世々へたる御くわんにやとそみえたる花ちる里ときこえし御かたあかしなともわたり給へりみなみひんかしのとをあけておはしますしん殿のにしのぬりこめ也けり北のひさしにかた／＼の御つほねともはさうしはかりをへたてつ、したり三月の十日なれば花さかりにて空のけしきなともうら、かにものおもしろく仏のおはすなる所のありさまとをからすおもひやられてことなりふかき心もなき人さへつみをうしなひつへしたき、こるさむたんのこゑもそこらつとひたるひ、きおとろ／＼しきをうちやすみてしつまりたるほどたにあはれにおほさる、をましてこのころとなりてはなに事につけても心ほそくのみおほし、るあかしの御かたに三の宮してきこえたまへる

おしからぬこの身なからもかきりとてたき、つきなんことのかなしき御かへり心ほそきすちは後のきこえも心にくれたるわさにやそこはかとなくそあめる

たき、こる思ひはけふをはしめにてこの世にねかふのりそはるけき夜もすからたうときことにうちあはせたるつ、みのこゑたえすおもしろしほの／＼とあけゆくあさほらけ霞のまよりみえたる花の色／＼なを春に心とまりぬへくにほひわたりても、千とりのさへつりもふえのねにをとらぬ心地しても、あはれもおもしろさものこらぬほとにれうわうのまいてきうになるほどのすゑつかたのかくはなやかに、きは、しくきこゆるにみな人のぬきかけたもの、色いろなども物のおりからにおかしうのみ、ゆみこたちかんたちめの中にももの、上すともてのこさすあそひ給かみしも心ちよけにけうあるけしきともなるをみ給にものこりすくなしと身をおほしたる御心のうちにはよろつの事あはれにおほえ給きのふれいならすおきる給へりしなこりにやいとくるしうしてふし給へりとしころか、る物のおりことにまいりつとひあそひ給人／＼の御かたちありさまのをのかし、さへともことふえのねをもけふやみき、給へきとちめなるらむとのみおほさるれはさしもめとまるましき人のかほとも、あはれにみえわたされ給まして夏冬のときにつけたるあそひたはふれにもなまいとましきしたの

心はをのつからたちましりもすらめとさすかなさけをかはし給かたくはたれもひさしくとまるへき世にはあらさなれとまつわれひとりゆくゑしらすなりなむをおほしつゝくるいみしうあはれなりことはてゝをのかしゝかへり給なんとするもとをきわかれめきておしまる花ちるさとの御かたに

たえぬへきみのりなからそたのまるゝよゝにとむすふ中の契を御かへり

むすひをくちきりはたえし大方のゝこりすくなきみのりなりともやかてこ

のついでにふたんのと経せんほうなとたゆみなくたうとき事ともせさせ給みすほうはことなるしるしもみえてほともへぬれはれいのことになりてうちはへさるへき所々寺々にてせさせ給ける夏になりてはれいのおつさにさへいとゝきえ入給ぬへきおり々おほかりそのことゝおとろおとろしからぬ御心ちなれとたゝいとよはきさまになり給へはむつかしけに所せくなやみ給こともなしさふらふ人々もいかにおはしまさむとするにかとおもひよるにもまつかきくらしあたらしうかなしき御ありさまとみたてまつるかくのみおはすれは中宮この院にまかてさせ給ひんかしのたいにおはしますへければこなたにはたまちきこえ給きしきなとれいにかはらねとこのよのありさまをみはてすなりぬるなどのみおほせはよろつにつけてものあはれなりなたいめんをきゝ給にもその人の人などみゝとゝめてきかれ給ふかんたちめなといとおほくつかうまつり給へりひさしき御たいめんのとたえをめつらしくおほして御物かたりこまやかにきこえ給院いりたまひてこよひはすはなれたる心ちしてむとくなりやまかりてやすみはへらんとてわたり給ぬおきあたまへるをいとうれしとおほしたるもいとはかなきほどの御なくさめなりかた々におはしましてはあなたにわたらせ給はんもかたしけなしまいらむことはたわりなくなりにてはへれはとてしはらくはこなたにおはすれはあかしの御かたもわたり給てこゝろふかけにしつまりたる御ものかたりともきこえかはし給うへは御心のうちにおほしめくらす事おほかれとさかしけになからむのちなとのたまひいつることもなしたゝなへてのよのつねなきありさまをおほとかにことすくなゝる物からあさはかにはあらすのたまひなしたるけはひなどそことにいてたらんよりもあはれに物こゝろほそき御けしきはしるうみえける宮たちをみたてまつりたまうてもをのくの御ゆくすゑをゆかしく思きこえけるこそかくはかなかりける身をおしむ心のましりけるにやとて涙くみ給へる御かほのにほひいみしうおかしけなりなとかうのみおほしたらんとおほすに中宮うちなき給ひぬゆゝしけになとはきこえなし給はすものゝついてなどにそとしころつかうまつりなれたる人々のことなるよるへ

なういとおしけるこの人かの人へらすなりなんのちに御心と、めてたつね
おもほせなどはかりきこえ給けるみと経などによりてそれいのわか御かたにわ
たり給三宮はあまたの御中にいとおかしけにてありき給を御心ちのひまにはま
へにすゑたてまつり給て人のきかぬまにまろかはへらさらむにおほいてなん
やときこえ給へはいと恋しかりなむまろはうちのうへよりも宮よりもは、をこ
そまさりて思きこゆれはおはせすは心ちむつかしかりなむとてめおしすりてま
きはし給へるさまおかしければほゝゑみなから涙はおちぬおとなになり給ひ
なほこゝにすみ給てこのたいのまへなるこうはいとさくらとは花のおり／＼に
心と、めてもてあそひ給へさるへからむおりは仏にもたてまつり給へときこえ
給へはうちうなづきて御かほをまもりてなみたのおつへかめればたちておはし
ぬとりわきておほしたてまつり給へれはこの宮とひめ宮とをそみさしきこえ給
はんことくちおしくあはれにおほされける秋まちつけて世中すこしすゝしくな
りては御心ちもいさゝかさはやくやうなれと猶ともすれはかことかましさるは
身にしむ許おほさるへき秋かせならねと露けきおりかちにてすくし給中宮はま
いり給なんとするをゑましはしは御らむせよともきこえまほしうおほせともさ
かしきやうにもありうちの御つかひのひまなきもわつらはしければさもきこえ
給はぬにあなたにもえわたり給はねは宮そわたり給けるかたはらいたけれとけ
にみたてまつらぬもかひなしとてこなたに御しつらひをことにせさせ給こよな
うやせほそり給へれとかくてこそあてになまめかしきことのかきりなさもまさ
りてめてたかりけれときしかたあまりにほひおほくあさ／＼とおはせしさかり
は中／＼このよの花のかほりにもよそへられ給しをかきりもなくらうたけにお
かしけなる御さまにていとかりそめに思給へるけしきなる物なく心くるしくす
ゝろにもものかなし風すこく吹いてたるゆふ暮にせむさいみ給とてけうそくによ
りる給へるを院わたりてみたてまつり給ひてけふはいとよくおきる給めるはこ
のおまへにてはこよなく御心もはれ／＼しけなめりかしときこえ給かはかりの
ひまあるをもいとうれしとおもひきこえ給へる御けしきをみ給も心くるしくつ
るにいかにおほしさはかんと思にあはれなれは
をくとみる程そはかなきともすれば風にみたるゝ萩の上露けにそおれかへ
りとまるへうもあらぬよそへられたるおりさへしのひかたきをみいたし給ても
やゝもせはきえをあらそふ露のよにをくれさきたつ程へすもかなとて御涙
をはらひあへ給はす宮

秋風にしはしとまらぬ露のよをたれか草はのうへとのみゝんときこえかは

し給御かたちともあらまほしくみるかひあるにつけてもかくてちとせをすくす
わさもかなとおほさるれと心になはぬ事なれはかけとめんかたなきそかなし
かりけるいまはわたらせ給ひねみたり心ちいとくるしくなりはへりぬいふかひ
なくなりける程といひなからいとなめけにはへりやとてみ木丁ひきよせてふ
し給へるさまのつねよりもいとたのもしけなくみえ給へはいかにおほさるゝに
かとして宮は御てをとらへたてまつりてなくゝみたてまつり給にまことにきえ
ゆく露のこゝちしてかきりにみえ給へはみす行のつかひともかすもしらすたひ
さはきたりさきゝもかくていきいて給おりにならひ給て御物のけとうたかひ
給ひてよひとよさまゝの事をしつくさせ給へとかひもなくあけはつるほとに
きえはて給ひぬ宮もかへり給はてかくてみたてまつり給へるをかきりなくおほ
すたれもゝことはりのわかれにてたくひあることゝもおほされすめつらかに
いみしくあけくれのゆめにまとひ給ほとさらなりやさかしきひとおはせさりけ
りさふらふ女ほうなどもあるかきりさらにものおほえたるなし院はましておほ
ししつめんかたなければ大将の君ちかくまいり給へるを御木丁の本によひよせ
たてまつり給てかくいまはかきりのさまなめるをとしころのほいありて思ひつ
ることかゝるきさみにそのおもひたかへてやみなんかいとゝおしき御かちに
さふらふ大とこたちと経のそうなどもみなこゑやめていてぬなるをさりとめた
ちとまりて物すへきもあらむこの世にはむなしき心ちするを仏の御しるしいま
はかのくらきみちのとふらひにたにたのみ申へきをかしらおろすへきよしもの
し給へさるへきそうたれかとまりたるなどの給御けしき心つよくおほしなすへ
かめれと御かほの色もあらぬさまにいみしくたへかね御涙のとまらぬをことは
りにかなしくみたてまつり給御ものゝけなどのこれも人の御心みたらんとてか
くのみ物はゝへめるをさもやおはしますらんさらはともかくても御ほいのこ
とはよろしきことにはへなり一日一やいむことのしるしこそはむなしからすは
侍なれまことにいふかひなくなりはてさせ給て後の御くしはかりをやつさせ給
てもことなるかのよの御ひかりともならせ給はさらん物からめのまへのかなし
ひのみまさるやうにいていかゝはへるへからむと申給て御いみにこもり候へきこ
ゝろさしありてまかてぬそうその人かのひとなとめしてさるへきことゝもこの
君そをこなひ給としころなにやかやとおほけなき心はなかりしかといかならん
よにありしはかりもみたてまつらんほのかにも御こゑをたにきかぬことなど心
にもはなれす思わたりつるものをこゑはつるにきかせ給はすなりぬるにこそは
あめれむなしき御からにてもいまひとたひみたてまつらんの心さしかなふへき

おりはたゝいまよりほかにいかてかあらむと思ふにつゝみもあへすなかれて女
はうのあるかきりさはきまとふをあなかましはしとしつめかほにて御木丁のか
たひらをものゝ給まきれにひきあげてみ給へはほのゝとあけゆくひかりもお
ほつかなければおほとなあふらをちかくかゝけてみたてまつり給にあかすつ
くしけにめてたうきよらにみゆる御かほのあたらしさにこの君のかくのそき給
をみるゝもあなちにかくさんの御心もおほされぬなめりかくなに事もまた
かはらぬけしきなからかきりのさまはしるかりけるこそとて御袖をかほにおし
あて給へるほど大将の君もなみたにくれてめもみえ給はぬをしゐてしほりあけ
てみたてまつるに中ゝあかすかなしきことたくひなきにまことに心まとひも
しぬへし御くしのたゝうちやられ給へるほどちたくけうらにて露はかりみた
れたるけしきもなうつやゝとうつくしけなるさまそかきりなきひのいとあか
きに御色はいとしろくひかるやうにてとかくうちまきはすことありしうつゝ
の御もてなしよりもいふかひなきさまにてなに心なくてふしたまへる御ありさ
まのあかぬ所なしといはんもさらなりやなのめにたにあらすたくひなきをみた
てまつるにしにいるたましゐるのやかてこの御からにとまらなむとおもほゆるも
わりなきことなりやつかうまつりなれたる女はうなどのものおほゆるもなけれ
は院そなにこともおほしわかれすおほさるゝ御心ちをあなちにしつめ給てか
きりの御ことゝもし給いにしへもかなしとおほすこともあまたみ給し御身なれ
といとかうおりたちてはまたしり給はさりけることをすへてきしかたゆくさき
たくひなき心ちし給やかてそのひとかくおさめたてまつるかきりありけること
なれはからをみつゝもえすくし給ましかりけるそ心うき世中なりけるはるゝ
とひろきのゝ所もなくたちこみてかきりなくいかめしきさほうなれといとはか
なきけふりにてはかなくのほり給ぬるもれいのことなれとあえなくいみし空を
あゆむ心ちして人にかゝりてそおはしましけるをみたてまつる人もさはかりい
つかしき御身をとものゝ心しらぬけすさへなかなかりけり御をくりの女はう
はまして夢ちにまとふ心ちして車よりもまろひおちぬへきをそもてあつかひけ
るむかし大将の君の御はゝ君うせ給へりし時のあかつきを思いつるにもかかれ
猶ものゝおほえけるにや月のかほのあきらかにおほえしをこよひはたゝくれま
とひたまへり十四日にうせ給てこれは十五日のあか月なりけり日はいとほなや
かにさしあかりてのへのつゆもかくれたるくまなくて世中おほしつゝくるにい
とゝいとはしくいみしければをくるとてもいくよかはふへきかゝるかなしさの
まきれにむかしよりの御ほいもとけてまほしくおもほせと心よはきのちのそし

りをおほせはこのほとをすくさんとし給にむねのせきあくるそたへかたかりける大将の君も御いみにこもり給ひてあからさまにもまかて給はすあけくれちかくさふらひて心くるしくいみしき御けしきをことほりにかなしくみたてまつり給てよろつになくさめきこえ給風のわきたちてふく夕暮にむかしのことおほしいて、ほのかにみたてまつりしものをと恋しくおほえ給に又かきりのほどのゆめの心ちせしなと人しれす思つゝけ給にたへかたかなしければ人めにはさしもみえしとつゝみてあみた仏くゝとひき給すゝのかすにまきはしてそなみたのたまをはもちけち給ひける

いにしへの秋の夕の恋しきにいまはとみえしあけくれの夢そなこりさへう

かりけるやむことなきそうともさふらはせ給てさたまりたるねん仏をはさるものにてほ花経などすせさせ給かたくゝいとあはれなりふしてもおきても涙のひるよなくきりふたかりてあかしくらし給いにしへより御身のありさまおほしつゝくるにかゝみにみゆるかけをはしめて人にはこと也けるみなからいはけなきほとよりかなしくつねなきよを思しるへく仏などのすゝめ給ける身を心つよくすくしてつるにきしかた行さきもためしあらしとおほゆるかなしさをみつるかないまはこの世にうしろめたきことのこらすなりぬひたまちにをこなひにおもむきなんにさはり所あるましきをいとかくおさめんかたなき心まとひにてはねかはんみちにもいりかたくやとやゝましきをこの思すこしなめにわすれさせ給へとあみた仏をねんしたてまつり給所くゝの御とふらひうちをはしめたてまつりてれいのさほう許にはあらしいとしけくきこえ給おほしめしたる心のほとにはさらになに事もめにもみゝにもとまらす心にかゝり給ことあるましければ人にほけほけしきさまにみえしいまさらに我よのすゑにかたくなしく心よはきまとひにて世中をなんそむきにけるとなかれとゝまらんなをおほしつゝむになん身を心にまかせぬなきをさへうちそへ給ひけるちしのおとゝあはれをもおりすくし給ぬ御心にてかくよにたくひなくものし給人のはかなくうせ給ぬることとをくちおしくあはれにおほしていとしはくゝとひきこえ給むかし大将の御はゝうせ給へりしもこの比のことそかしとおほしいつるにいと物かなしくそのおりかの御身をおしみきこえ給し人のおほくもうせ給にけるかなをくれさきたつほとなき世なりけりやなとしめやかなる夕くれになかめ給ふ空のけしきもたゝならねは御このくら人の少将してたてまつり給あはれなることなとこまやかにきこえ給てはしに

いにしへの秋さへいまの心ちしてぬれにし袖に露そをきそふ御返し

露けさはむかしいまとおもほえす大方秋の夜こそつられけものゝみかな

しき御心のまゝならはまちとり給ては心よはくもとめとゝめ給つへきおとゝの御心さまなれはめやすきほとにとたひくのなをさりならぬ御とふらひのかさなりぬることゝよろこひきこえ給うすゝみとのたまひしよりはいますこしこまやかにてたてまつれり世中にさいはいありめてたき人もあひなうおほかたのよにそねまれよきにつけても心のかきりをこりて人のためくるしき人もあるをあやしきまてすゝろなる人にもうけられはかなくしいて給こともなに事につけても世にほめられ心にくゝおりふしにつけつゝらうくゝしくありかたかりし人の御心はへなりかしさしもあるましきおほよその人さへそのころは風のをとむしのこゑにつけつゝ涙おとさぬはなしましてほのかにもみたてまつりし人の思なくさむへき世なしとしころむつましくつかまつりなれつる人くゝしはしものこれるいのちうらめしきことをなけきつゝあまに也このよのほかの山すみなどに思たつもありけりれいせん院のきさいの宮よりもあはれなる御せうそこたえすつきせぬことゝもきこえ給ひて

かれはつるのへをうしとやなき人の秋に心をとゝめさりけんいまなんことはりしられ侍ぬるとありけるをものおほえぬ御心にもうちかへしをきかたくみ給ふいふかひありおかしからむかたのなくさめにはこの宮はかりこそおはしけれといさゝかの物まきるゝやうにおほしつゝくるにもなみたのこほるゝを袖のいとまなくえかきやりたまはず

のほりにし雲井なからもかへりみよ我秋はてぬつねならぬよにおしつゝみ給ひてもとはかりうちなかめておはすすくよかにもおほされすわれなからことのほかにほれくゝしくおほししらるゝことおほかるまきはしに女かたにそおはします仏の御まへに人しけからすもてなしてのとやかにをこなひ給ちとせをももろともにとおほししかとかきりあるわけれそいとくちおしきわさなりけるいまははちすの露もことくゝにまきるましくのちのよをとひたみちにおほしたつことたゆみなしされと人きゝをはゝかり給なんあちきなかりける御わさの事ともはかくゝしくの給をきつることゝもなかりければ大将の君なむとりもちてつかうまつり給けるけふやとのみわか身も心つかひせられ給おりおほかるをはかなくてつもりにけるも夢の心ちのみす中宮なとおほしわするゝときのまなくこひきこえたまふ